

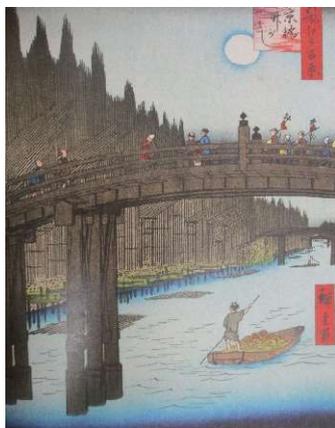
展覧会 「広重ブルー」

太田記念美術館（原宿） 2024.10.05～12.08

浮世絵師「歌川広重」は、『東海道五十三次』をはじめ、『風景画』を数多く残したことで知られるが、その風景画作品の特徴のひとつが“空や海の鮮やかな青”である。この色は、江戸時代後期に日本にも広がった「ベロ藍」と呼ばれる青色の絵具によるもので、「プルシアンブルー」や「ベルリンブルー」とも呼ばれるこの絵具に触発されて、当時の絵師は「ベロ藍」を用いて風景画を描くようになったとされている。画伯「広重」が「ベロ藍」と出会ったのは30代半ばのことで、これを契機に風景が目覚め、移ろいゆく空や水面の様子を繊細に表現し、人気を博し晩年に至るまで詩情に富んだ数々の名作を発表した。

「ベロ藍」は、オランダの染料で鮮やかな発色が際立つ「青色」で、既存の藍色（インディゴブルー）とはまったく異なるもので、浮世絵界に大きな色彩革命が起こり、「新しい青」は「広重」もいち早く導入し版画界を席卷した。

歌川広重の《名所江戸百景》は、名所絵の大御所となった画伯が、最後まで固執した江戸の風景で、八百八町あるいは郊外の景勝地を100枚以上の大規模な錦絵揃物とすることは、おそらく「広重」にとっては宿願であったものだ。



歌川広重《名所江戸百景 京橋竹がし》

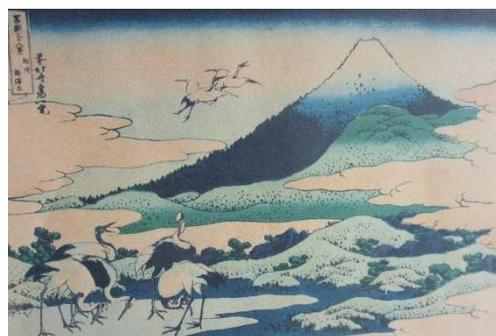
画伯らしく、四季折々の景を叙情的に演出した作品は、京橋にかかる秋月を印象的に描写し、橋上の左の男性も美しい月に目を留めているようである。

図は、銀座方面からの眺めで、橋の上の中央の男が持つ赤提灯には、江戸時代後期の彫りの名工であった「彫竹」の名前が刻まれている。

竹河岸と称された幾何学模様の表現された貯蓄用の竹が、画面にユニークな効果を与えている。



《月に兎》



《富士三十六景 相州梅沢左》